

第2号

2022年  
冬

# 祈禱書 改正 ニュース

発行：日本聖公会 祈禱書改正委員会  
【発行日：2022年2月25日】



日本聖公会祈禱書とは、  
日本聖公会において信仰と生活を共にする人が、  
神に造られ、いのちを与えられた民として、  
キリストと共に旅路を歩いていくために用いる祈りの書です。  
－ 祈禱書改正ミッション・ステートメント － (第1号にて詳述)

## マイ祈禱書もっていますか？

司祭フランチェスコ成岡宏晃  
(祈禱書改正委員)



「成岡君、聖公会の教会で洗礼受けたんだ。じゃあ、祈禱書とか持ち歩いてたりするの？」  
学生時代に他教派の友人にかけられたこの言葉が妙に悔しくて、受洗後一年間ほどバイトやカラオケに行くときも意地になって「マイ祈禱書」を携帯していた時期がありました。そのときは、祈禱書が自分自身の教会生活においてどのような意味があるのかきちんと理解していたわけではなく、クリスチャンとしての特別感を味わいたかっただけなのかもしれません。しかし、図らずもこの数年後に川口基督教会で神学生として夏期実習を過ごしていた時に、手ぶらで主日礼拝に参加し、教会の備品を拝借していた私は大西修主教から「きみは、自分の礼拝用書も持っていないのか。教役者というのは『礼拝のプロ』なんだから、礼拝用書ぐらい自分のものを持参して来なさい」と言われ、「マイ祈禱書」をはじめ「マイ礼拝用書」を持参して礼拝に参加することの意味を考えるようになりました。

「祈禱書は英国宗教改革におけるもっとも重要な果実である」と言われているほど、アングリカンコミュニオンにとって祈禱書は信仰

生活の中心に据えられるべきものであると言えます。なぜなら、英国を含む宗教改革の最も重要な意義は「自国語で聖書を読むことができる」、「自国語で礼拝をささげることができる」という点にあるからです。さらに、信徒と聖職が交互に祈りの言葉を唱える聖公会の祈禱文は、信徒と聖職がともに礼拝を創り上げていくという聖公会の共同体性を具現化したものでもあるからです。

このアングリカンコミュニオンが大切にしている共同体性の一端を振り返りながら「礼拝のプロ」とはいったい誰を指すのかと考えるとき、それは教役者だけに限らず、神さまへ祈りをささげるために礼拝に集められた一人ひとりのことであり、礼拝とはそこに参加する一人ひとりが主役となって神さまにささげる一つひとつの祈りの言葉によって創り上げられていくものであることを再認識させられるのです。

祈禱書改正という日本聖公会全体の大きな働きを一つのきっかけとして、「マイ祈禱書(礼拝用書)」の携帯を意識し、礼拝に限らず日々の生活の中で神さまに祈りをささげる「祈りのプロ」として、今まで以上に祈りの言葉や聖書のみ言葉を身近に感じながら、祈りのひと時を大切にし、この困難な時を共に乗り越えてまいりたいと願っています。

## 祈禱書改正の旅路 ～ 作業状況① ～

祈禱書改正委員会は、これらの項目ごとに、分担して作業を行っています。

教会暦	朝夕の祈り	日々の祈り
主日の司祭不在の礼拝	嘆願	諸祈禱・感謝
聖餐式	特禱	教会問答
入信の式	懺悔の式（共同・個人）	結婚関係の諸式
誕生感謝	病者の諸式	死に臨む諸式と死にまつわる諸式
聖職按手式	牧師任命式	伝道師認可式
礼拝堂聖別式	聖書日課	詩編
期節の礼拝	式文用曲譜・カンテイクル	序文・付録

今回は以下の5項目について、現段階での作業状況をご報告いたします。

### 病者の諸式 / 死に臨む諸式と死にまつわる諸式

「病者・死」の項目では、誰しものが必ずその生涯において経験する病と死を、信仰共同体の出来事として受け止め、どの段階においても共に歩もうとすることが礼拝式文に示されることを願って作業を進めています。各管区の祈禱書や論文、解説書などを参考にしつつ、現時点において主に確認していることは次の通りです。

#### 1. 病者の礼拝について

これまでは教会が病者を訪問するという前提での礼拝式文でしたが、現代医療の進歩もあって病気を抱えながらも生涯を過ごすことへと変化していること、また信徒や聖職の共同体全体でささげる礼拝としての位置づけとするために、「病者と共にささげる礼拝」とタイトルを変更し、礼拝の構成や内容にも反映されるようにします。使いやすさも大きな課題です。

また現代日本における諸課題として、病気に由来した差別の現状、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックや生活の変化によって個人や社会全体が被る影響などを加味した祈禱文の必要性、病を負っている方が主体的に祈ることの重要性、丁寧な牧会が困難な状況の中でのミニストリーの拡大や可能性などが挙げられています。多様な状況に応じた祈りを検討しています。

#### 2. 葬儀に関わる礼拝について

死から葬儀、またその後の埋葬・逝去記念と続く礼拝をそれぞれのプロセスとし、一連の流れを死の先にも続く信仰の旅として捉えた礼拝式文を策定しようとしています。また、日本各地での葬儀の状況や死生観を大事にしつつも、キリスト教共同体として死と復活の信仰を表現することによって希望を示し、また社会的な孤立にあっても教会は神の家族として葬儀をおささげすることを大事にしてきました。そのような前提にあって、「魂への配慮」に満ちた式文となるように作業を進めています。

改正祈禱書にどの部分を入れ、また別冊をどのような構成にするのか、主な柱である通夜の祈りと葬送式の違いの明確化や「死に臨む人のための嘆願」の位置づけなどの具体的な課題を通して検討作業を進めています。

## 諸 祈 禱 ・ 感 謝

祈禱書の諸祈禱・感謝には、教会のため、人のため、折々のライフイベントや、病、社会の課題のためのお祈りなどがあります。これらのお祈りは礼拝や集会だけでなく、日常のふさわしい場面にも用いられるものですが、掲載されているお祈りのままではしっかりこないものもあるのではないのでしょうか。

現在、世界の諸管区の祈禱書からも諸祈禱項目を抽出したうえで、日本の年間行事やライフイベントなどからも項目案の作成を進めています。近年増加する自然災害、また人権や地球環境に関する事など、新たな項目があっても良いかもしれません。また、既存の各祈禱文で「何が祈られているのか」の視点を改めて確認する中で、祈りのテーマがより明確に伝わるような文言を検討する必要性も感じています。

諸祈禱の祈禱文には網羅的であると同時に具体性も求められますが、すべての事柄にフィットする祈禱文を起草することは不可能です。しかし、具体的な事柄についてのお祈りでも、その視座を一段二段高いところに置くことによって永く用いられるお祈りになるのではないかと考えています。

歴史的に古くから大切に受け継がれているものもありますので、祈禱文の起草にあたっては教会の伝統を重んじつつ、皆さまにも試用・フィードバック頂きながら現代とこれからのわたしたちが教会や信仰生活のなかで唱えやすいものであることを目指します。

## 聖 餐 式

祈禱書改正準備委員会が設置されることになった 2014 年の「第 61 総会決議録」において、現行祈禱書聖餐式文に関する以下の 7 つの研究課題が挙げられています。

- ① 参入の式の課題
- ② 「懺悔と赦しの祈り」「懺悔・赦罪」について
- ③ 代禱の選択肢の可能性
- ④ 感謝聖別における「叙唱（特別叙唱）」について
- ⑤ 「記念唱」の選択肢の可能性
- ⑥ 「近づきの祈り」の研究
- ⑦ 祝福と派遣について

以降、研究が進められ、2016 年より設置された祈禱書改正委員会がこれらの研究を継続しつつ、現在は新しい感謝聖別文の導入のための作業及び、特定の期節（教会暦のサイクル）に応じた祈禱文—参入の式、懺悔、感謝聖別における叙唱（特別叙唱）、派遣等—を充実させるための研究、作業を行っています。初代教会から現代に至るまでの多様な祈禱文、式文の構造を確認していますが、数多くある多様な祈禱文及び構造には固有の神学（テーマ）が反映されています。

現段階では、祈禱書改正ミッション・ステートメントや聖公会の教会の 5 要素、宣教の 5 指標の中に具体的に指し示されているテーマを意識しつつ、豊かな聖餐式文を起草することができるよう努めています。

## 特 禱

特禱は、各主日と各祝日のテーマ・意図を示し、祈りを共にする者の思いを一つにする祈禱文です。その起源は 6 世紀頃のレオ典礼書まで遡ることのできるものもあり、時代の中で必要な事柄を付け加え、不必要な内容は削除して、磨きに磨かれてエッセンスのみの簡潔な形になった、しかも今を生きている祈りであると言えます。

また、特禱と聖餐式聖書日課との関係で言いますと、従来の祈禱書（日本聖公会では『1959 年祈禱書』まで）では、特禱のテーマと聖書日課とは密接に関連しているとされてきました。

しかし『1990 年祈禱書』から採用された聖餐式聖書日課では、顕現後第 2 主日から大斎節前主日、特定 1 から降臨節前主日までは必ずしも関連しているわけではありません。これらの祭色が緑の期節は、より多くの聖書の御言葉を聴くため、使徒書も福音書も準継続朗読という選び方（旧約聖書は福音書と関連している）で作成されているからです。今回の祈禱書改正では、聖書日課については現在のものを再改訂した「改訂共通聖書日課」を採用することになっています。

そのことも踏まえて、「改訂共通聖書日課」に収録されている特禱の翻訳作業を進めながら、今後セイラムミサ典書(\*1)から現在の英国や米国の祈禱書、ローマ教会の 20 世紀以降のミサ典書、日本聖公会祈禱書の各特禱と比較検討し、相応しいものを選択できればと考えているところです。 (\*1) 中世のソールズベリー大聖堂を中心に用いられたローマ・ミサ典書の地方版。クランマー大主教が『第一祈禱書』作成時に主要な資料とした。

## 詩 編

祈禱書は、全体の約 3 割にも及ぶページ数を割いて、詩編全編を収めています。それは、詩編をもって賛美、感謝、懺悔、祈願することを大切に継承してきた聖公会の礼拝の特徴と言えるでしょう。さらには、礼拝の随所に、詩編の言葉に基づく唱和があります。

今回の詩編の改正に際しては、『聖書協会共同訳』（2018 年）の翻訳成果を信頼し、この訳文に基づいて、礼拝で唱える（発声する）こと、そして歌うことも意識した言葉の調整を基本方針としています。ヘブライ語原典も確認しつつ、現行『祈禱書』と、その参考資料であったカトリック教会の『詩編－現代語訳』（1972 年）も見比べながらの作業です。これを、日本福音ルーテル教会式文委員会との協働プロジェクトとして進めています。両教会は同じ礼拝用詩編を持つこととなります。

作業経過の中で、皆様のご意見を伺いたいことがしばしば出てきます。例えば「朝の礼拝」で用いられる詩編 95 編のように、現行『祈禱書』の言葉のリズムに馴染んでいるものを、『聖書協会共同訳』に変えるかどうかです。この詩編は、文語聖書から文語祈禱書に採用された訳文の趣を継承するために、前改正委員も、あえてこの詩編にはカトリック『現代語訳』の全面採用はしなかったようなのです。その他にも、23 編で「牧者」を継承するか、聖書の訳語に拠る「羊飼い」とするかも検討中です。「改正試案」として礼拝等で試用していただくことも考えています。

## 「日本の祈禱書」とは？—祈禱書と文化 司祭 ダビデ 市原信太郎（祈禱書改正委員）

「ミッション・ステートメント」（前号参照）が述べるように、改正祈禱書は「日本聖公会の祈りの書」であることを大切に考えています。これが具体的に何を指すか、というのは古くて新しい問いです。

前号にも記したとおり、1960年代までの聖公会祈禱書は、基本的には1662年のイングランド教会『第5祈禱書』の翻訳に地域の事情を踏まえた修正を加えたものでした。しかし、礼拝の形式や文言が1662年の祈禱書に束縛されていることは、地域文化との乖離を生じさせ、教会が人々と関わりのない異質なものと見なされてしまう危険が認識されるようになりました。カトリックの第2バチカン公会議（1962～65）の影響も受けて、1960年代以降ほとんどの管区がより抜本的な祈禱書改正に着手し、ランベス会議でも祈禱書改正の基本方針などが決議されています。その中で大切にされている視点が「インカルチュレーション (inculturation)」です。

「インカルチュレーション」とはなじみのない言葉ですが、語感通り「文化 (culture)」と関係があり、「文化適応」などと訳されます。それぞれの地域固有の文化的背景の中で、福音が十全に伝達・受容されるよう、教会が礼拝などの信仰表現を刷新していくということです。これは単なる文化的な適応にとどまらず、その地に根ざした福音の開花を図るところから、「文化内開花」という訳もあります。

このように見てきたとき、聖公会が長年モデルにしてきた1662年祈禱書も、16世紀から17世紀のイングランドにおけるインカルチュレーションのひとつの結果であり、他の地域ではそれぞれに適切な礼拝表現がより創造的に考

えられ得るという観点から、各管区の祈禱書改正の中で様々な成果が生まれました。

例を挙げると、ニュージーランド祈禱書（1989）では、様々な文化が共生する管区の事情を反映して、英語の他にマオリ語・フィジー語・トンガ語が併記されています。身近なところでは、大韓聖公会祈禱書（2004、2015）の葬送儀礼は韓国文化を最大限に尊重し、土葬と火葬両方の式を収録するなどの工夫が見られます。台湾聖公会は、組織上はアメリカ聖公会の一教区であり、祈禱書はアメリカ聖公会祈禱書の翻訳ですが、「増編礼儀書」（2010）という祈禱書増補版を作成し、婚約・新居の祝福・葬送の式文のほか、中国文化で大切な祖先崇敬の儀式を用意しています。私たちの現行祈禱書では、洗礼志願式や通夜の祈りの導入などがこの例となるでしょう。

私たちにとってのインカルチュレーションとは、「着物と草履で礼拝する」ことなどではなく、自分たちの文化の中でイエス・キリストの福音を宣べ伝えるためには、どのような礼拝表現が最もふさわしいのか、という問いに答えていくことです。

日本聖公会では2017年より「堅信前の陪餐」を実施していますが、これは非キリスト教国である日本でのインカルチュレーションの試みであるとも言えます。改正祈禱書でこの実践を取り入れた新たな入信の式が導入されれば、「日本の祈禱書」への大きな一歩となることでしょう。



1925年頃、カナダ人司祭と日本人伝道師が和室で献げる早禱



エクレシア・オランス

## 祈る教会

— 聖公会の礼拝と祈禱書〈2〉 —

主教 加藤 博道

「神の見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造以来、被造物を通してはっきりと認められるからです。」

(『ローマの信徒への手紙』第1章20節)



### 「 sacrament 」について

「これはほんの感謝のしるしです」という素敵な言葉があります。そこで渡されるものが500円のハンカチであったとしても、「あ～、この人の感謝は500円か」と思う人はいない筈です。それは目に見えては表せない感謝の気持ちの、一つの小さなしるしであるわけです。小さなしるしの向こうに、目に見えない世界の広がりがあります。

日本聖公会の「綱憲」第3項と、祈禱書中の「教会問答」に、わたしたち聖公会の信徒が大切に守り、それによって生かされている「救いに必要な聖奠」として洗礼と聖餐が挙げられ、また「教会問答」にはそれに準じる形で「聖奠的諸式」が挙げられています。聖奠には sacrament とルビがふられており、それは「目に見えない霊の恵みの、

目に見えるしるしまた保証」であると言われてい

ます。

聖公会の教会と礼拝への想いを深めていく上で、 sacrament の理解はとても大切です。他の教派では秘跡、機密、聖礼典とも呼ばれます。 sacrament の内容と数については、歴史的に多くの議論がありましたが、カトリック教会は最終的にその数を7つと定義しました(洗礼、堅信、聖餐、告解、婚姻、塗油、聖職按手)。一方、多くのプロテスタント教会は、キリストご自身が定められ、聖書に明らかな、救いに必要な sacrament は洗礼と聖餐と決めました。聖公会も同様です。もともとギリシャ語のミステリオン(神の秘義)に対応す

るラテン語として sacramentum ( sacramentum ) という言葉が用いられた経緯があり、やがて sacramentum は具体的な洗礼、聖餐等の式を指す言葉として用いられるようになりました。ラテン語の sacramentum のもともとの意味には誓約、それも古代の軍隊の入隊の誓約を意味した側面があり、確かに sacramentum にはある種、加入儀礼 (イニシエーション) 的な、人生の新しい局面を切り開いていくような性質を感じとることができます。



以上は、狭義の sacramentum 理解と言えるでしょうが、もう少し視野を広げてみることも出来ます。まず根本的には冒頭の聖句が示すように、神が創造された、この被造世界そのものが神の栄光を映し出している sacramentum 的なものと言えます。「聖奠的世界」( sacramental world ) です。創造論に立脚したこうした感覚は、聖公会の大事な宝です。その世界にキリストが受肉されたのです。物質的な現実世界や人間性、身体性に対する一定程度肯定的な姿勢が聖公会にはあると思います。一方、 sacramentum という考え方自体を厳しく否定する教派もあります。

中世期からとくに宗教改革の時代、 sacramentum を巡る議論は、正しい sacramentum の条件、有効

性に関する細かい議論に集中してきました。しかし20世紀後半、 sacramentum を巡る神学は広がり、深まりを見せてきました。キリストご自身が、見えない神の見えるしるし、根源的な sacramentum であるという理解(「私を見た者は父を見た」ヨハネ14:9)、さらには教会が、今は直接には見て触れることの出来ないキリストの、「一種の sacramentum 」であるという理解も深められてきました。 sacramentum という意味はその <しるし> であり <道具> であるということです。キリストは父なる神を指し示す、教会はそのキリストを指し示すしるしであると同時に、キリストの働きをこの世界に継続する道具であるというわけです。ですから sacramentum を重んじるということは、ただ楽観的に与えられた恵みを喜ぶというだけではなく、自分たちが、また教会が、真にキリストの臨在を指し示すしるし、また道具となっているだろうかという自らへの問いかけにもつながります。さらに、神の創造によるこの世界を、現在わたしたちは破壊しつつあるのではないか！ ですから sacramentum 論は聖公会の倫理、社会倫理の基礎であり、宣教と密接に関係する事柄なのです。

(前・祈祷書改正委員会担当主教)



## 祈禱書豆知識



この前礼拝で、旧約聖書朗読の時に「イザヤ書第 61 章 1 節から 3 節まで」と言って始めたら、教会の先輩に「朗読前は『旧約聖書はイザヤ書第 61 章 1 節から』と言うんだよ。ルブリックにそう記されているから気をつけようね」と声をかけられました。

ルブリックって何ですか？



そんなに大切なんですか？

ルブリックとは、礼拝についての規定のことです。中世頃は別冊でしたが 1549 年の英国聖公会の第一祈禱書で初めて礼拝式文に挿入されました。その時、祈禱文と区別するために赤い文字（ラテン語で rubrica ルブリカ「赤」の意）で記されたことが名前の由来です。

日本聖公会の祈禱書では、文字を細く小さくして、祈禱文と区別しています。正式には「礼拝細字規定」と言います。「会衆はひざまずく」「一同次の言葉を歌いまたは唱える」など、聖餐式文にもたくさん書かれていますね。



そうですね。それらの所作一つひとつが礼拝の精神を表しているので、ルブリックには教会の教義的な意味も示されているのですよ。注意深く読み、その意図を理解すれば礼拝の理解も深まります。

聖公会の祈禱書は、その国の文化や時代背景なども考慮して作られてきたのですね。これまでの日本の祈禱書にも、日本独自の要素があったのですか？



へえ～、おもしろいですね！今度の改正で、どんな「日本らしさ」が私たちのお祈りの形になって出てくるのか、楽しみです！

葬送の式の中にある「通夜の祈り」は日本文化に根差した独特のものですね。『1959 年祈禱書』の別冊諸式『葬送諸式』にありましたが、正式に祈禱書に収められたのは、現行の『1990 年祈禱書』からなんですよ。

また、『1938 年祈禱書』の附録に初めて登場した「洗礼志願式」も、日本聖公会独自のものです。



聖餐式で奉献の前に行う「懺悔」では、司祭と会衆が交互に自らの罪を告白し、神の赦しを祈り合いますが、これも世界では珍しい形式です。他国の聖公会では全員で告白し、司祭が赦しの言葉を唱えるのが一般的のようです。

参考文献：若月麻須美『祈禱書の歴史及び内容』（聖公会出版） 森紀旦『改訂増補 マラナ・タ』（日本聖公会京都教区）

「祈禱書改正ニュース」は祈禱書改正に関するさまざまな報告とともに、祈禱書や礼拝について、あらためて考えるきっかけとなるようなニュース・レターを目指しています。次号は 2022 年 6 月末頃に発行予定です。複数部お入り用の方は、管区事務所までご連絡ください。祈禱書改正委員会のホームページもどうぞご覧ください。QR コードからも閲覧できます。

<https://johann18942.wixsite.com/nskk-prayerbook2026>



※前号の記載に誤りがありました。以下の通り、お詫びして訂正いたします。

P.8 「祈禱書改正委員の紹介」4 行目 「司祭 林和宏」→「司祭 林和広」

祈禱書改正委員会 広報チーム